学校法人
鎌倉女子大学

沖縄旅行のひとこま

人が多くの年、生きながらえ、そのすべてにおいて自分を楽しませても、
暗い日の多くあるべきことを忘れてはならない。『旧約聖書』より

沖縄の日没は、鎌倉よりも大分晩(おそ)く、１２月の５時というのに、青さの中に夕焼けが流れ込むほどの、まだ薄暮にもしばらく間がありそうな明るい空です。私は、家内と一緒に、西にシナ海と東に首里城の朱色の屋根を遠望することの出来る丘の上に立っていました。

叔父の名前が刻まれた「平和の礎(いしじ)」や「ひめゆりの塔」、サトウキビ畑に隠れるように建つ「白梅之塔」と、さっきから案内役を買って出てくれたタクシーの運転手が、「沖縄の空は、アメリカ軍の制限空域が広いので、ほら、那覇空港に降りる飛行機もあんなに低空で進入してくるでしょう」と、眼下を指差しながら教えてくれました。

この丘は、旧海軍の司令部があった場所で、今では「海軍壕」という名前の公園になっています。丘の頂上には、縁起が記されたいくつかの石塔や石板、それにアメ色の錨(いかり)のモニュメントが設(しつら)えられ、その陰には、哀絶極まりない電文を海軍次官宛てに打電した沖縄方面根拠地隊司令官大田実海軍少将の遺骨も、小さくひっそりと葬られておりました。

> 沖縄県民ノ実惜ニ関シテハ県知事ヨリ報告セラルベキモ　県ニハ既ニ通信力ナク三二軍司令部又通信ノ余力ナシト認メラルルニ付　本職県知事ノ依頼ヲ受ケタルニ非ザルモ　現状ヲ看過スルニ忍ビズ　之ニ代ツテ緊急御通知申上グ　〈略〉　青壮年ノ全部ヲ防衛召集ニ捧ゲ　残ル老幼婦女子ノミガ相次グ砲爆撃ニ家屋ト家財ノ全部ヲ焼却セラレ　〈略〉　而モ若キ婦人ハ率先軍ニ身ヲ捧ゲ　看護婦烹炊婦ハ元ヨリ砲弾運ビ挺身切込隊スラ申出ルモノアリ　〈略〉　只々日本人トシテノ御奉公ノ護ヲ胸ニ抱キツツ　遂ニ□(?)□(?)□(?)□(?)与ヘ□(?)コトナクシテ　本戦闘ノ末期ト沖縄島ハ実情形□(?)一木一草焦土ト化セン　〈略〉　沖縄県民斯ク戦ヘリ　県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ

この丘の下は、ツルハシとクワで掘りめぐらされ、背の高い大人がかがみながら一人ずつ通れるほどの、とても堅牢(けんろう)な要塞とはいえない地下壕になっています。木の机に花が飾られた六畳ばかりの司令官室跡、発電室跡、傷ついた兵士たちが立ったまま仮眠をとったというほんの少しばかりの空間、自決のために炸裂させた手榴弾の傷痕(しょうこん)生々しい壁……。高等部の生徒諸君は、どのような思いを抱きながらここを歩いたのだろう、私は、ふと、そんなことを考えました。

この地下壕に降りる入口に展示室があり、当時の写真や沖縄戦の映像、またいくつかの遺品を見ることが出来ます。

Ｖサインをしながら笑顔で記念写真をとる若い女性に苛立(いらだ)ちを感じながら、その脇のガラスケースに目を遣(や)ると、小さな手帳が飾られていました。近寄ってみると、山田弘國中佐という根拠地隊機関参謀の方が子息へ宛てた遺書でした。

雅弘よ

父は「バトン」をお前に渡したよ!!
父が望んで達する事出来なかった
更に大なる飛躍こそは
お前以外に誰が襲いで呉れる
ひとがあろうか-----
「爪跡」より
昭和二十年　海軍壕にて

一人の青年士官が差し迫った時間と暗く閉ざされた空間の中で、抑制された言葉の中に万感を込めてしたためたこの六行の短い文章は、これ以来、私の脳裏から離れることはありません。

翌日は、今から四半世紀ほど前、人生の終盤にさしかかった父と父の昔の仲間の方たちが、戦時中敵機の空襲やマラリアで命を落とした戦友たちを偲んで、平和の実現と彼我戦没の諸霊を祈念して建立した慰霊碑にお参りするため、宮古島へ向かうことになっていましたが、このたった二日の旅行だけでも、出会った人たちのまごころのこもった快活な人柄と同時に、沖縄はまことに鎮魂の島であることを今更ながら強く実感した次第です。

>前のページへ戻る